

# 「ほととぎす」と芭蕉の句

佐藤 貢

## The Cuckoo and Basho's Haikai

Mitsugi SATO

### 第 1 章

「ほととぎす」という鳥は、日本文学では文学資料としてよく取扱われている。万葉集を見ると、4,516首の中に、131首も「ほととぎす」を詠んだ長歌、短歌があるし、古今集には31首の短歌がある。

次に近世俳句ということになると、

守武千句（守武）	梅翁宗因癸句集（素外）	哥仙大坂俳諧師（西鶴）
とくとくの句合（素堂）	俳諧七車（鬼貫）	鬼貫句選（太祇）
初心もと柏（言水）	今宮草（来山）	続いまみや草（什山）
冬の日（荷兮）	春の日（荷兮）	曠野（荷兮）
曠野後集（荷兮）	ひさご（珍磧）	猿蓑（凡兆・去来）
炭俵（野坡等）	続猿蓑（沾圃）	貝おほひ（芭蕉）
野ざらし紀行（芭蕉）	鹿島紀行（芭蕉）	笈の小文（芭蕉）
更科紀行（芭蕉）	おくの細道（芭蕉）	嵯峨日記（芭蕉）
芭蕉翁句集（松竹）	芭蕉句選（華雀）	芭蕉句選拾遺（寛治）
蕉句後拾遺（康工）	芭蕉新巻（蚕臥）	俳諧一葉集（仏兮・湖中）
泊船集（風国）	俳諧芭蕉庵小文庫（史邦）	枯尾花（其角）
虚栗（其角）	続虚栗（其角）	五天集（其角）
玄峰集（嵐雪）	杉風句集（梅人）	野坡吟艸（風之）
去来癸句集（蝶夢）	丈草癸句集（蝶夢）	蓮二吟集（一浮）
北枝癸句集（北海）	韻塞（李由・許六）	篇突（李由・許六）
卯辰集（北枝）	深川（洒堂）	有磯海（浪化）
となみ山（浪化）	陸奥衛（桃隣）	千鳥掛（知足）
其袋（嵐雪）	其便（泥足）	蘿葉集（也有）
蘿の落葉（也有）	うづら衣（也有）	千代尼句集（既白）
太祇句選（嘯山・雅因）	太祇句選後編（五雲）	蓼太句集（吐月）
蕪村句集（几董）	蕪村翁文集（忍雪・其成）	蕪村句集拾遺（秋声会）
新花摘（蕪村）	井華集（几董）	白雄句集（碩布）
半化坊癸句集（車蓋）	暁台句集（臥央）	堅並集（都貢）
しをり萩（暁台）	秋の日（暮雨門）	幣ぶくろ（士朗）
佐渡日記（且水）	爪じるし（蘭芝）	夜のはしら（暁台）
曾波可理（巢兆）	一茶癸句集（一茶門）	一茶癸句集（一具）

おらが春（一茶）	風俗文選（許六）	俳家奇人談（玄々一）
続俳家奇人談（青々）	近世畸人伝（蒿蹊）	芭蕉翁絵詞伝（蝶夢）
俳諧古選（嘯山）	俳諧新選（嘯山）	古今俳諧明題集（涼袋）
類題癸句集（蝶夢）	新類題癸句集（蝶夢）	俳諧故人五百題（亀足）
癸句五百題（白雄）	俳諧癸句題叢（太筈）	癸句類聚（了輔）
俳諧故人続五百題（一具）		

以上94冊の書物を調査採集してみると、その中に1048句あり、中に芭蕉の句が42句ある。

次に漢詩の中に「ほととぎす」は如何に取材しているか、これに就ては1例として良寛詩集のものをあげてみる。

#### 客中杜鵑

春帰未得帰

杜鵑懇勸帰

世途皆危嶮

郷里何時帰

訓、春帰れどもいまだ帰るを得ず、杜鵑ねんごろに帰らんことを勧む、世途みな危嶮なり、郷里いずれの時にか帰らん。

意、春はもうすぎ去ったのに自分はまだ帰郷できない、ホトトギス（不如帰）がねんごろに帰れ帰れと啼いて勧めてくれるのに、けれども、世上人心のみな險悪なのを思うと、いつ郷里に帰れるのかわからない。

#### 客中作

旅亭蕭条孤客情

五更沈々子規鳴

回首遙望万里月

夜々思君聞鐘声

訓、旅亭蕭条たり孤客の情、五更沈々子規鳴く、首を回らして遙かに望む万里の月、夜々君を思い鐘声を聞く。

意、宿屋でひとり客となって泊っている自分の心はまことに淋しい、しいんとした真夜中に、ホトトギスの鳴き声が聞こえてくる、見上げると遙かに万里隈なく照らす月影が仰がれる、こうして夜毎、君を偲びつつ明けの鐘を聞いている。

#### 聞左一順世

微雨空濛芒種節

故人捨我何処行

不堪寂寥則尋去

万朶青山杜鵑鳴

訓、（左一の順世を聞く）微雨空濛たり芒種の節、故人われを捨てていずこにか行ける、寂寥に堪えずすなわち尋ね去れば、万朶の青山に杜鵑鳴く。

意、きり雨のしとしとと降りこめるこの佻びしい芒種の季節に、君は私を捨ててどこに行ったのだ、さびしさに堪えかねて、君の跡を尋ねて行くと、緑樹におおわれた山の中に、ホトトギス

が啼いている。

以上は良寛の漢詩中人口によくのぼる詩の一端をあげたのである。

次に小説の題名としたものに、徳富蘆花作「不如帰」がある。

この小説は著者の出世作である。1898年（明治31）11月29日から翌年5月24日まで、国民新聞に連載されたものである。

海軍少尉男爵川島武男と陸軍中将子爵片岡毅の長女浪子との幸福な新婚生活が、浪子の肺結核発病により破れ、家を重んじる川島未亡人は息子が艦隊演習で留守中に独断で嫁を離縁するのである。

浪子は療養生活中に知ったキリスト教にも救われず、もう二度と女には生まれたいと死ぬのである。

この作の背後には、子爵三島通庸の長男に嫁した陸軍大将伯爵大山巖の長女倍子の実話があり、著者もその哀話を聞いたときの「冷たい」感動を「富士」第2巻に記しているのである。

この感動一つをまっしぐらに生かしたことがこの作の生命で、明治時代の婦人解放思潮の大水脈を突き空前の社会的声価を得るにいたった作品である。

猶、新歌舞伎脚本に、ほととぎすこじょうのらくげつ（沓手鳥孤城落月）というのがある。これは1897年（明治30）に坪内逍遙が「早稲田文学」誌上に発表した3幕物の史劇で、その3年前に発表した「桐一葉」とともに大阪落城悲劇に取材した2部作の1つである。

前編の「桐一葉」は冬の陣の後、これは夏の豊臣家没落を扱い、淀君と秀頼母子の滅亡と片桐且元の苦衷を描いたものである。

「桐一葉」は真の意味での劇場作者圏外の新歌舞伎作の第一声ともいべきものだけに、逍遙のシェークスピア風の作劇概念に加えて旧歌舞伎技巧の匂いが強いが、この「沓手鳥」の方はずっと旧歌舞伎技巧や感性が減少し、シェークスピア悲劇風に近づいている。

初演は1905年（明治38）5月大阪角座で、11世仁左衛門が淀君と且元二役を演じたが、決定版はむしろ翌年3月東京座での5世歌右衛門の淀君での再演の方であった。以上の資料は、ホトトギスという鳥名を文学作品、和歌、俳句、漢詩、小説、歌舞伎脚本などにも使用されているものを取りあげて見たのである。

最後に忘れられないのは、俳句雑誌「ほととぎす（ホトトギス）」があることである。高浜虚子主宰で、1898年（明治31）10月、正岡子規は、門弟柳原極堂が両者の郷里松山で発行していた「ホトトギス」誌の経営難に陥っていたのを東京に移して受継いだものである。

同年10月号を第2巻第1号として虚子を発行名義人として、みずから経営に当たったのである。

ほととぎすというと、私は次から次に文学についてのいろいろの事が思い出されるのである。

そこで私は、芭蕉という俳人は、ほととぎすのどんなところを捕らえて俳句に詠んだかと云うことに興味が傾むいて来てしまったのである。

## 第 2 章

万葉集4068を見ると、

乎里安加之、許余比波能麻牟、保登等芸須、安気牟安之多波、奈伎和多良牟曾  
(居り明し今宵は飲まむほととぎす明けむあしたは鳴き渡らむぞ)

保登等芸須と書いている。

万葉集1465を見ると、  
霍公鳥，痛莫鳴，汝音乎，五月玉爾，相貫左右二  
(ほととぎす，いたくな鳴きそ，汝が声を，五月し玉に，あへぬくまでに)  
霍公鳥と書いている。

古今集を見ると、

ほととぎす声も聞えず山彦はほのかに鳴く音をこたへやはせぬ(みつね)  
時鳥はつこゑ聞けばあぢきなくぬしさだまらぬ恋せらるはた(そせい)  
の如く、「ほととぎす」と平仮名で書いてあるもの、「時鳥」と書いてあるものが目につく。

近世名歌集3000首を見ると、

杜鵑つまをとひつつ血あゆまでなくなる声を聞けば悲しも(田安宗武)  
郭公しばしば鳴きしあけがたの山かきくもり小さめふり来む(香川景樹)  
子規あすはいづこに語りつぎいひつぎゆかむ夜半のはつ声(荷田春満)  
時鳥山とし高くなのるより麓になりぬうぐひすの声(下河辺長流)  
ほととぎすなく山里に来て見れば若葉の外の色なかりけり(熊谷直好)  
の如く、杜鵑、郭公、子規、時鳥、ほととぎすの語が使用されている。

近世俳人の句を見ると、

南雲にもまるる夜ありほととぎす(鳥酔)  
暁の夢をはめなん時鳥(一茶)  
あかつきや地震の後の杜鵑(几董)  
逢はぬ恨み血を吐くまでぞ郭公(暁台)  
岩倉の狂女恋せよ子規(蕪村)  
洗ひさす湯殿の耳や杜宇(也有)  
'多き日も声たたかはず不如帰(河翠)  
聞かぬとしあるも命ぞ蜀魂(也有)  
まぼろしの花忘れめや蜀鳥(几董)  
周燕あたらしうなる夜の空(升六)  
望帝われや鼠に引かれけん(其角)

の如く、ほととぎす、時鳥、杜鵑、郭公、子規、杜宇、不如帰、蜀魂、蜀鳥、周燕、望帝などを使用している。

現代俳句歳時記(春・夏)(中村汀女監修，実業之日本社刊)を見ると、「古来詩歌に多く詠われ、沓手鳥、妹背鳥、卯月鳥、夕影鳥、夜直鳥、などの異称があり、杜鵑、杜宇、杜魂、子規、不如帰などとも書く」と記されている。

猶鳥類図鑑などを調査してみると、英語では、Little Cuckoo と書き、日本、満州、中北支那、ヒマラヤ、マレー地方、マダガスカルにもいるという事が書かれている。

然し日本とマダガスカルに住む鳥とは少し異なっていると書かれている。

### 第 3 章

私は芭蕉の句にはホトトギスを詠んだどんな句があるかに就いて、1句づつに就いて解説してみようと思う。

次にあげた句が芭蕉の主な作品ということになるが、同一の内容が句型に依って異っている

ものもあるので、私は次の如き作品をとりあげて述べてみることにする。

岩つつじ染る泪やほととぎす (24才)  
しばしまもまつやほととぎす千年 (24才)  
またぬのに菜売に来たか時鳥 (34才)  
郭公まねくか麦のむら尾花 (37才)  
ほととぎす正月は梅の花咲り (40才)  
冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす (41才)  
戸の口に宿札なのれほととぎす (天和年中)  
ほととぎすなくなくとぶぞいそがはし (44才)  
須磨のあまの矢先に鳴か郭公 (45才)  
ほととぎす消行方や嶋一つ (45才)  
鳥さしも竿や捨けんほととぎす (44才)  
ほととぎす今は俳諧師なき世哉 (41才)  
郭公うらみの滝のうらおもて (46才)  
田や麦や中にも夏のほととぎす (46才)  
野を横に馬牽むけよほととぎす (46才)  
落くるやたかくの宿の郭公 (46才)  
橘やいつの野中の郭公 (47才)  
京に居て京なつかしやほととぎす (47才)  
曙はまだむらさきにほととぎす (50才)  
ほととぎす大竹藪をもる月夜 (48才)  
ほととぎす鳴音や古き硯ばこ (49才)  
ほととぎす啼や五尺の菖草 (49才)  
郭公声横たふや水の上 (50才)  
木がくれて茶つみも聞や時鳥 (51才)

以上24句ということになるが、句形からいうと上5句にほととぎすをもって来たもの10句、下の句にもって来たものが13句の割合で、中7句のものが1句ある。

ほととぎすと5音のものだけに、上の句か下の句にする以外に俳句としては中の句に取入れることは困難なことである。

## 第 4 章

### 1. 岩つつじ染る泪やほととぎす

この句は寛文7年の夏の作で、季語は「ほととぎす」で「続山井」にある。

子規は俗説に「八千八声鳴いて血を吐くともいい、「和訓栞」を見ると、口わきに肉生ずれば鳴くごとに肉さけ血出るなり」と書かれている。

寛文7年というと、芭蕉が24才の時ということになる。青年の頃の芭蕉が、涙も血涙であろうと思って詠んだのであるかも知れない。

奥山の岩間などに、まっ赤に燃える、つつじを見て深山越えに哀しい声で鳴いている時鳥を連想したものであろう。

句の意は、だから岩つつじの花をあかく涙で染めてなくほととぎすですよというのである。

## 2. しばしまもまつやほととぎす千年

この句は寛文7年の夏の作で、季語は、「ほととぎす」で、「続山井」にある。

「松は千年」と云う言葉と、ほととぎすを待つ心は数十年もたつ思いがあるという言葉がはいつているのが技巧の見せどころであると思われる。

1句の意は、時鳥を待つ心は、ほんの暫しの間でも待ちどおしくて、数千年もたつ思いであるというのである。

貞門風のおかしさは何と云っても、この句では「まつ」は「待つ」と「松」をかけ、ほととぎすの「す」は、「数千年」の「数」をかけ言葉としている点である。

そして、このように時鳥を待ち遠しいおもいで待つ気持を詠んでいるのである。

## 3. またぬのに菜売に來たか時鳥

この句は、延宝5年の夏の作品で、季語は「時鳥」である。「六百番癸句合」にある。「來たか」の「か」は疑問と感歎の意をふくめた助詞であるから「來たのであるか……にくらしい」というくらいに受けとるべきである。

又、人によると「來たが」と、とる人達もいるけれども、それでは調があまりに俗っぽくなるような気がするのである。

1句の意は、時鳥の声を聞きたいものだと、朝早くから待ちに待っているのになかなか来ない。それなのに、來たものは待ちもしない菜売の声であるが、にくらしい気さえするその声であるというのである。

菜売りが季節はずれであるので、唐突の気がするので、何となく1句の趣がはっきりしないように思う。

## 4. 郭公まねくか麦のむら尾花

この句は延宝8年の頃の作である。「武蔵曲」にある。

問題は、麦の穂（夏）と「郭公」のどれを季語とするかであるが、この場合は郭公を主とするのが意味の上から穏やかであるように思われる。

1句の意は、みると麦の穂が出揃って丁度芒の穂がむらがっているように見える。昔から芒の穂は人を招くように和歌などでは詠まれているのであるが、麦の穂はやはり尾花のように招くようすをするが、季節からいって時鳥の鳴く頃だから、あの麦の穂は、時鳥を招くのであろうというのである。

麦の穂を尾花と見立てて、そこから尾花に縁のある「招く」という言葉をいかして人を招くのを転じて時鳥を招くと云ったところに、和歌の境地から一步出て新味を出しているように思う。

## 5. ほととぎす正月は梅の花咲り

この句は天和3年の夏の作で、「虚栗」にでている。

正月も梅も季語であるが、この句では正月や梅は道具につかっているだけで、句の意味の主となるものではないので、季語は「ほととぎす」とすべきである。

この句は、ほととぎすの鳴く音を待つ気持ちを直接に云わずに、梅の花の時が来るやすぐにその花をさかせたことをいって諷したものである。

1句の意は、ほととぎすよ、もう初夏の卯月になったのになぜ鳴かないのであろう。梅の花をみなさい。春になったばかりの正月にはちゃんと花を咲かせているではないかというのである。

一寸禅語めいた所のある句で、時鳥と梅花の質のちがうものによって諷したために難解になっているわけであろうと思う。

#### 6. 冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす

この句は、貞享元年の冬の作で、甲子吟行の中にある。

季語としては、冬牡丹、千鳥、雪、ほととぎすと4つあるが、ほととぎすは夏の季であるから問題とならぬが、冬牡丹、千鳥、雪はみな冬の季であるが、最も印象の強いと思われるのが、冬牡丹であるので、季語「冬牡丹」とするのが適当であると思う。

甲子吟行の途次、桑名での作で、前書を見ると「桑名本當寺にて」とある。この本當寺は正しくは本統寺と書かれている。

故にこの句の意は、いまこの本統寺に来てみると、庭には冬牡丹が咲いている。それに近くに千鳥の声もきこえる。普通牡丹は初夏のものでその咲く頃は丁度ほととぎすが鳴くのであるが、冬の今はそれにかわるように千鳥が啼いている。換言すれば千鳥は冬のほととぎすと云ったようなものだと言うのである。この句の諸注のうち「年考」を見ると、

鉢たたき暁がたの一声は冬の夜さへも鳴くほととぎす（拳白集）や、「深山には冬も鳴くらんほととぎす玉散る雪を卵の花と見て」（家々）の歌をあげている。

芭蕉はこの歌を記憶していて、ふと思いついたものかも知れないが、句意には関係がないものである。

#### 7. 戸の口に宿札なのれほととぎす

この句は時代がはっきりしないが、天和年中だろうと思われ、夏の作で、季語は、ほととぎすである。

「五十四郡」の中にあり、前書に「戸の口」とある。戸の口は岩代耶麻郡の地名で現在の猪苗代湖の西北岸の翁島付近である。

「陸奥名所句合」のために詠んだものであるから実際にその地に行って詠んだものではないと思う。

「戸の口」という地名の面白さに興味がひかれて時鳥に呼びかけて詠んだものらしいのである。

1句の意は、ほととぎすよ、わが戸口を通る時は、ほととぎすと名のりあげその宿所をつけて行きなさいというのである。

戸の口は、家の戸口のことであるから、ここでは地名の戸の口と掛けているわけである。宿札は、その人の住所又は宿所であることを知らせる札で門口に掲げた札である。

#### 8. 郭公なきなき飛ぞいそがはし

この句は、貞享4年の夏の作で、季語は郭公である。「続虚栗」に出ている。

この句は単純に考えれば、ただそれだけの句であるとも思うが、44才ともなった芭蕉という人間から考えて見ると、これを人の世のさまに思いくらべて見ると、深い意味をもつ句とも思う。

1句の意は、ほととぎすの声をきいた。空を仰ぐとほととぎすは、なきなき声は遠くへ遠くへと消えていった。鳥の中には木にとまってゆっくり鳴く鳥も少ないのに、ほととぎすは飛びながら鳴いてゆくとは何といういそがしい事であろうと云うのである。

じっと見送る芭蕉の心の中には、鳥でもいろいろな生まれ合わせをもっているものだと、人の世の運命といったようなものを漠然と考えていたのかも知れないと思う。

9. 須磨のあまの矢先に鳴くか郭公

この句は貞享5年（元禄元年）の夏の作で、季語は郭公である。「笈の小文」の中にある。

「笈の小文」の旅の終わりに須磨の浦に出ての吟である。

浦辺の漁夫たちのわざを見て詠んだもので「笈の小文」の本文に漁夫のさまをのべて「藻塩たれつつなど、歌にもきこえ侍るも、いまはかかるわざするなども見えず、きすごといふ魚を網して真砂の上に乾し散しけるを鳥の飛来りてつかみ去る。是をにくみて弓もておどすとぞ、海士のわざとも見えず、もし古戦場の名残をとどめてかかる事をなすにやと罪深く云々」としているのので、発想のもとがこの文でわかる。

1句の意は、須磨の浦というところ、歌や物語にはやさしい連想をもつのであるが、いま来てみると漁夫たちは弓をもって鳥をおどしている。

その矢先にあたる方向に、ほととぎすが鳴いてすぎた。思ったとは全く別のありさまで、この浦の古戦場であるというその名残りをとどめているのであろうか。洵にやさしい姿とちがって罪ふかく感じたことであると云うのである。

10. ほととぎす消え行く方や鳴ひとつ

この句は、貞享5年（元禄元年）の夏の作で、季語はほととぎすである。

「笈の小文」の旅の途次、須磨での吟である。

1句の意は、須磨の海辺に立って景色を眺めている時、ふとほととぎすが鳴いて過ぎていった。その声によって鳥の行ったあたりを見送ると、姿は遠く遠く消えていったそのはるか彼方に、うすく島が1つ浮かんで見えるというのである。

島は淡路島だろうと思う。写生風に描かれているので、かえって読む人に多くの想像の余地を与えているようである。

この句の解釈について、「消えゆく」というのは鳥の姿か、または鳥の声かについて2説がある。そして又この2つの外に鳥の姿と声と共に消えてゆくという説もある。

この問題について、安倍能成氏は、「唯だ消えゆくは姿が見えるのではないが、しかしほととぎすの声に形をよせて、消え行くという詞そのものは、「声が消々ゆく」という意味ではないかと思う」と云っている。

11. 鳥さしも竿や捨けんほととぎす

この句は、貞享4年の夏の作で、季語はほととぎすである。

出典は「千鳥掛」にあり、前書に「さし棹書たる扇に」とある。それで画賛であることがわかる。

1句の意は、時は夏の初めであり、折柄ほととぎすの鳴いてすぎる頃である。ここに鳥指し竿が画いてあるが、これは鳥さしが竿をもって鳥をさしていたが、ふと時鳥の声をきき、その声にききほれて鳥指し竿をなげ出したので、その竿がこれであろうというのである。

この句は、芭蕉が思いつきだけの作品で誰でもできそうな句ではあると思うが、時鳥の音に重さをつけているところは、風流の趣が句の中に流れているようにも思う。

この句は、「千鳥掛」以外の句集には見ない作である。

12. ほととぎす今は俳諧師なき世哉

この句は、貞享元年頃の夏の作品で、季語はほととぎすである鹿島紀行附録にある。

1句の意は、ほととぎすが鳴いてすぎた。この鳥は昔から多くの詩や歌によまれたが、今は俳諧師たちがみな真の俳句を作るといような人がないので、ほととぎすも本当の意味でその



情趣も句によまれない、まことに情けない世の中であるよというのである。

そして芭蕉はひそかに俳諧に対する自己の抱負をのべたものであろうと思われる。

一串抄には、表は当時美吟を吐く人なきをもて時鳥の美声を諭し、裏の心はをかしみを専らとする人多きを歎じたるなりと、解説しているのである。

### 13. 時鳥うらみの滝のうら表

この句は元禄2年の夏の作で、季語は、時鳥である。

この作品は「雪丸げ」に載っている。「奥の細道の旅で、日光の裏見の滝で詠んだものである。

前書には「甘余町山を登りて滝有。岩洞の頂より飛流して百尺千岩の碧潭に落たり。名を恨の滝とかや申伝え侍るよし」と書かれている。

1句の意は、ここ裏見の滝の裏にこもって滝を見ていると、時鳥の声が聞こえる、それが滝の表にもきこえるが裏でも聞こえるというのである。

滝のどろどろと鳴る音の間を縫うように時鳥の鋭い声が滝の表にもうらにもきこえる様を云ったのであって、あたりの景色がおのずから想像される。

滝の裏からほととぎすの声を聞いたので、それが滝のうら表にひびいたというのは、決して無理な表現ではなく、当然の表現であるといつてよい。

啼きながら、すばやく飛び過ぎる子規の生態もよく描かれているように思う。

苔花は、この句は日光山の句であるから「奥の細道」にありそうなものだが、此句は奥の細道にはない。この事について芭蕉は会心の作でない為に捨てたのを、後人が拾ったものだと思う。

### 14. 田や麦や中にも夏の時鳥

この句は、元禄2年の夏の作で、季語は時鳥で、「雪丸げ」にある。

この句は、「曾良書留」に次の前書が書かれている。

「しら川の関やいつことおもふにも、先秋風の心にうごきて、苗みどりにむぎあからみて、粒々にからきめする賤がしわざもめにちかく、すべて春秋のあはれ月雪のながめよりこの時はやや卯月のはじめになん侍れば、百景の一つをだに見ることあたはず、ただ声をのみ筆を捨るのみなりけらし」とある。

この句は、「奥の細道」の旅で、黒羽の浄法寺図書の亭で詠んだ句である。

1句の意は、前書を生かしてなすべきである。するとこの意は、このあたりは、昔白川の関も近いときいているが、それはどの辺かと思うと、秋風のけしきや月雪の眺めなども思われるが、今は夏の初めの事で、それらの景色は全くない。ただ緑の田、赤らんだ麦畑が見えるだけである。それらの中に於てもあの時鳥だけは夏の景物としてこのあたりの景色にふさわしく感じられるというのである。

### 15. 野を横に馬牽きむけよほととぎす

この句は、元禄2年の夏の作で、季語はほととぎすである。

「奥の細道」に載っている句である。「奥の細道」の途次、那須野を馬で横ぎった時、馬子から短冊に何か書いてほしいと頼まれて、詠んで与えた句である。

1句の意は、いま夏の広野を馬上に眺めながら行くと、ふと空をほととぎすが鳴いて過ぎた。馬子よ、馬を横に引きむけてくれよ、あのほととぎすの鳴いた方へというのであると思われる。

文の意らか、今まで進んで来た方向を縦と見、ほととぎすの行った方向を横と云っているのである。

馬子に乞われて、目の前の景色そのままに句にしたもので、全くの即興句であるといつてよい。

広々とした野原を進んでいる感じがよく表現されているので、まことに野趣も深いし、旅の情もよく表われている作品である。

#### 16. 落くるやたかくの宿のほととぎす

この句は、元禄2年の夏の作で、季語はほととぎすである。「雪丸げ」にある。

「雪丸げ」を見ると、前書に「高久角左衛門に宿る。みちのく一見の桑門同行二人、那須の篠原を尋て、猶殺生石を見んところへける程に、雨降りければ先このところに留て」と書かれている。

「奥の細道」の旅の途中、黒羽から湯木に行く途中で、雨のために高久に一宿したものと思われる。その時の吟詠である。

1句の意は、高久の里につくと、ほととぎすの声を聞いた。高久（高く）というから高いところから、時鳥の音が落ちてくるように思われたというのである。

この句などは考えてみると、ただ高久という宿の名によって、落ちてくると興じたまでのことであるから、単純で、即興の句である。

芭蕉が高久についた時は、はげしい雨であり、わびしい旅心になる筈であるが、旅に出てからの日数も短く、はじめのことであつたので気分は明るかつたように思われる。

#### 17. 橘やいつの野中の郭公

この句は元禄3年又は4年の夏の作で、季語は橘の花である。この句は郭公ももとより季語（夏）であるが、この場合は橘を主題と見るのが穏当であろうと思う。

「卯辰集」の中に載っている句である。

橘の香は「古今集」には「さつき待つ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする」などの如く昔をしのぶことに詠まれている。

この句の意は、橘の花の香にふと立ちどまって、その昔を思い出させるようなつかしい香にひたっていると、その時も時、ほととぎすが鳴いてすぎた。あのほととぎすの音も亦どこかの野できいたような気がして何か昔が思われる日であるというのである。

句の中に何か回顧的な気持ちがあり、橘の香にほととぎすの声をきいた時の古典的な気分をこの句としたように思われる。

#### 18. 京に居て京なつかしや郭公

この句は元禄3年の夏の作で、季語はほととぎすである。「曠野後集」にある。

1句の意は、京都に滞在している時に、ある日ふとほととぎすの鳴いてすぎる声をきいた。ところも京都であるため、歌によまれた昔のことなどもいつか思い出されて、京都にいながらその京都が今更のよになつかしく思われたというのである。

句そのものからは、時刻のこともよくわからないけれども、夜明けか又は夜更けの頃のように思う。

この句は、「曠野後集」「泊船集」「一字幽蘭集」は皆「京に居て京なつかしや郭公」となっているが、「陸奥千鳥」「己が光」「小春宛書簡」には「京にても京なつかしや郭公」となっている。

この点に就て穎原退蔵氏は「京都に居ながらなほ」という心もちを十分現わす為には、「京に居て」だけでは物足りないと云って、「京にても」の方がよいと説く人もいる。

京都は古い歴史をつつむ都だから、ほととぎすの声によって京の昔がいつか思い出されてきたのであろう。

そこで「京なつかしい」という言葉がうかんできたのである。

#### 19. 曙やまだ紫にほととぎす

この句は、元禄6年の夏の作で、季語はほととぎすである。「真蹟写」にあり、前書を見ると「勢田に泊りて、暁石山寺に詣で、かの源氏の間を見て」と書かれている。

「芭蕉句選拾遺」には「あけぼのやまだ朔日にほととぎす」となっているが、真蹟の方を私は正しいものと受け取りたいのである。

真蹟の方は、前書により石山寺の「源氏の間」(紫式部が源氏物語を書いたといひ伝える室)を見て詠んだというのである。

そして又、その「曙やまだ紫」は「枕草子」に「春は曙、やうやう白くなりゆく山ぎは少し明りて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」の語によっているようである。

1句の意は、夜が明けかかった。東の方は紫色にまだ春のけしきをとどめているのに、はやくもほととぎすの声がきこえたことであるというのである。

源氏の間から平安時代の気分を連想して、「枕草子」に縁をつけた技巧的な表現をとったものである。

紫の語も「源氏の間」から式部に縁をつけた語である。

「あけぼのやまだ朔日にほととぎす」となると、もっと具体的に云っていて、句の意も、夏もまだ卯月朔日だというのに、夏になったばかりの日に、もう時鳥の声をきいてうれしい事であるよということになる。

#### 20. ほととぎす大竹藪をもち月夜

この句は、元禄4年の夏の作である。季語はほととぎすである。嵯峨日記の20日(4月)の条に出ている。

嵯峨の落柿舎に滞在中に詠んだ句である。

1句の意は、深い広い竹藪を月の光は多くの葉をすかして洩れている静かな涼しい初夏の夜に、ふと空に一声、するどいほととぎすの声が聞えた。そしてあとはまた深い静かな夜となってしまったと云うのである。

大竹藪というのがこの場合には最も適当した語であるといつてよいであろう。この句では「もち月夜」というのは、ちょっと気になる表現であるが、初案には「もち月夜」となっているのである。

それに依つても月が主であつて、万葉集にも「今宵の月夜明らゆくこそ」などの用例があるように、夜はただそえた言葉であるが、日の光の洩れている夜という意もおのずから考えられるので、むしろ俳句特有な含みの多い言葉づかいと見ていいと思う。

この句は、「笈日記」「泊船集」には中7が「大竹原」とあり、「芭蕉庵小文庫」には下5が「もち月ぞ」となっている。

#### 21. 杜鵑鳴音や古き硯ばこ

元禄5年の夏の作で、季語は杜鵑である。「陸奥衛」には「不ト一週忌・琴風興行」と前書がある。

不卜は岡村氏で、江戸に住み、未得の門人で立羽不角の師で、元禄4年4月に没。

琴風は生玉氏、摂津の人で、江戸に出て不卜の門人となって後に其角の門に入った。享保11年2月に没した。

この句は、不卜の1週忌に当たって詠んだものであるという。

1句の意は、今は亡き人を偲ぶ句会に出席してみると、折柄丁度ほととぎすが鳴いてすぎていった。ほととぎすは昔を偲ぶのに縁のある鳥として歌にも詠まれているのであるが、見ればそこには故人のつかった古い硯箱が置いてある。ほととぎすの声をきいて、その古い硯箱を見ると、いよいよ故人がなつかしく偲ばれて来ると云うのである。

「古き」はほととぎすの声にも、硯箱にもかかり、また「鳴く音」という語も悲しい心持ちにつながる言葉である。

この句は、故人の使った古い硯箱を見て、亡き人を偲ぶその自然の情を、季節のほととぎすと結び合わせて一層懐旧の情の切なるところを詠んだのである。

## 22. ほととぎす啼くや五尺のあやめ草

この句は、元禄5年の夏の作で、季語はほととぎすである。あやめ草も季語（夏）であるがこの句の場合は、ほととぎすを主題と見るべきである。

「陸奥衛」に出ている句である。

1句の意は時は夏もだんだん深くなって池の菖蒲もすいすいと伸びて五尺ほどにもなっている。その空をほととぎすが、朝の空気をふるわせて鋭い声で鳴いていったというのである。

緑の葉のあざやかにすいすいと伸びたあやめ草と、ほととぎすの声とが調和していて、夏の朝のすがすがしい、さわやかな趣を現わしていると思う。

この句には、その基となっている2種の古典がある。その1つは「古今集」恋の歌で、「時鳥鳴くや五月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな」である。

その2は、「後鳥羽院御口伝」に「五尺のあやめ草に水をかけたるやりに歌は詠むべしとかけり」とあるのである。

即ち前の歌の上の句の5月を5尺とかえて句となし、後の5尺のあやめ草をそのまま用いたので、この2つを組み合わせて作ったようなものである。

## 23. 郭公声横たふや水の上

この句は元禄6年の夏の作で、季語はほととぎすである。「藤の実」にある。

芭蕉が荊口に宛てた書簡の中に、自ら句の成った事情が書かれているが、それに依ると許六に「篤突」や、「自得癸明弁」の議論、「三冊子」にも述べられてあって、古来多く論ぜられた句である。

1句の意味は、ほととぎすが大きな河の上を鳴いてすぎた。その声があたりの静けさをつき破って、水の上にずっと広がっていったというのである。

この句の中で魅力ある語は、「横たふ」であろう。いかにも余韻をもって水の上に声がひろがるようなひびきをもっている。

荊口宛の書簡は、「笈日記」には後半が出ているけれども、前半には杉風や曾良にすすめられて、「水辺のほととぎす」ということを詠んだことが記されているのである。

古注は多く、芭蕉は「一声の江に横たふや」の方が優れていると思っていたのである。

然し世の人が好む所に従って「水の上」の方を採用したと説いている。

## 24. 木がくれて茶摘も聞や杜宇

この句は、元季7年の夏の作で、季語はほととぎすである。「炭俵」にある。

素龍齋と芭蕉庵で親しく語る時に示した句である。

1句の意味は、夏の初めで、茶の木畠では茶摘女の歌などがきこえ、茶の木の間からはチラホラ姐さんかぶりも見えている。その上をほととぎすが一声すみぎった声をひびかせて鳴きながら飛びすぎた。きっと茶摘女たちも、茶摘をやめてその声のあたりを見上げたことであろうというのである。

この句はきっと旅路の実感で得たものを句として芭蕉庵で示したものであろうと思う。

緑におおわれたあたりの光景までが目に浮かんで来るような気さえする作品である。

「炭俵」「別座舗」「陸奥衛」「泊船集」にもこの句が載っている。

以上24句のうち、「岩つつじ染る泪やほととぎす」や「しばしまもまつやほととぎす千年」の句が芭蕉24才の作である。

そして「曙はまだむらさきにほととぎす」「郭公声横たふや水の上」「木がくれて茶つみも聞や郭公」などが50代の作品ということになる。

よく作品を見ると、芭蕉が「ほととぎす」の句を詠む場合に、若さと老年の味が出ていることを比較してみることも興味深いものがあるように私には感じられるのである。

## 第 5 章

現代俳句には「ほととぎす」の句としてどんなものがあるかと云うことになるが、正岡子規は、筆名を子規（ほととぎす）などと云っているが、詠んでいないのである。

明治以後の俳句の中には次の如きものが知られている句と云っていいと思う。

杜鵑啼くや伏屋の受験生	紅葉
時鳥廁半ばに出かねたり	漱石
傘にいつか月夜や時鳥	鬼城
命をかし郭公聴きに軽井沢	東洋城
時鳥野に甘藍の渦みだれ	水原秋桜子
ランプ吊りなほ暮れかねつ時鳥	水原秋桜子
牧草の丈なすまにほととぎす	水原秋桜子
時鳥女はものの文秘めて	長谷川かな女
<sup>こだま</sup> 笛して山ほととぎすほしいまま	杉田久女
火を入れて寺の大焔やほととぎす	阿部慧月
時鳥草原わたる雲の影	京極杜藻
ほととぎすすでに遺児めく二人子よ	波郷
ほととぎす根岸の里の俣宿	久保田万太郎
満山の芽杉かぐはしほととぎす	橙 黄子
野の窪も内裏の跡ぞほととぎす	黒木野雨
汽缶車の胴体濡れてほととぎす	楸邨
山中に河原が白しほととぎす	相馬遷子
田疲れの鬮を枕ほととぎす	谷口小糸
ほととぎす聞きさだめんと棹緩く	後藤夜半
ほととぎす暁の棚田に水あふれ	山本照子
ほととぎす夕冷え胸の奥よりす	馬場移公子